

奇刊

クリルタイ 5.0

Special!!
インターネットと人



「twitter世論」の誕生

—：『フラット革命』（講談社、2007年）『インフォコモンズ』（講談社、2008年）を上梓されてから数年経ちました。その後の状況の変化と今後、人とウェブとの関わりがどう変わっていくのかという部分をお聞かせください。

佐々木（S）：それは随分難しい質問ですね（笑）、一番大きかったのはやはりtwitterが出現した事ではないかと思います。結局、ブログはソーシャルメディアであると言いながらも、コミュニケーションする手段がトラックバックとコメント欄ぐらいしかありませんでした。そして、ブログによって作られるコミュニティも荒れやすい部分があって、上手く世論形成的なパースペクティブを生めない側面があったように思います。twitterはそこが非常に上手くできています。実は最初アカウントを取った時は「なんじゃこれ」って思ってたんですが（笑）、真面目にやった方がいいかなと思い始めたのは去年の春ぐらいですね。はてなブックマークのような荒れるコミュニケーションでもなく、ブログのようなディスコミュニケーションでもなく、共鳴・リスペクトを交換できる。なおかつ、情報がちゃんと流れるアーキテクチャになっていると思います。。

—：twitterがそうした共鳴・リスペクトを交換できるアーキテクチャになったのはなぜでしょうか。

S：インターネットは「情報流通」と「繋がり」の両方の役割を持っていて、必ずどちらかに振りすぎる側面があります。例えば日本のガラパゴス携帯で行われているコミュニケーション、モバイルやケータイ小説、プロフなどはみんな「繋がり」のメディアであって情報を流通させる機能はほとんどありません。一方でブログは情報流通はきちんとされていますが、そこではコミュニケーションが不在です。繋がり的な機能に乏しいんですね。だから、一つの集団というか、世論形成のための圏域にはなりにくいと思います。twitterは非常にアーキテクチャ的に良くできています。そこは狙ってなくて結果的にそうなったのかもしれないですが、繋がりと情報流通が同時に行われ、かつそこでリスペクトが交換できるコミュニティが形成するという意味では非常に良くできたツールだと思います。twitterでなくfacebookのステータスアップデートでもいいですが、どちらにせよリアルタイム性の高い、しかも短いセンテンスでお互いやりとりして、そこにフォロー/フォロワー関係があるのがそういったアーキテクチャを生み出す要素になっているのではと考えています。

—：twitterは「情報流通」と「繋がり」両方の機能を持ったツールであると。

S：結果として、ここ一年ぐらいの間に、twitter上にある種の「twitter世論」が出来上がっています。今回の民主党の代表選はその典型で、ネットでは小沢元幹事長支持で盛り上がっていましたが、結果として小沢が負けた事で「twitter世論敗北」という形になっていますが、ネット言論をずっとみてきた人間からすると、ここまでマスメディアに対してオルタナティブな世論だとみ

んなが認識するところまで行っているのが大変な進歩じゃないかと思います。3、4年前だと「所詮ぼくら落ちこぼれですから」という認識しかなかったわけで、それがマスメディアに対抗する言論空間になりうるとは誰も思っていませんでした。そんな事を言っていたのは数人しかいませんでしたし、そんな事言っても誰も理解してくれませんでした。その意味では進歩はしていると思います。

—：それは世間の目がtwitter論壇を見る目だけではなくて、使っている人たちがその自分たちのtwitter世論みたいなものに対する自尊心を持てるようになったという事ですか？

S：多分そうだと思います。でも相変わらずtwitterは可視化されてないんですよ。Toggtterがありますが、年寄りも誰も見ていません（笑）。「田舎在住、50歳専業主婦」みたいな、テレビがメディアの中心であると思っているマス世論の中心層からみると、相変わらずtwitterっていうのはどこで誰が何を喋っているのかわからない。可視化されてない。本当はそこまで行かないといけないんですよ。ネット利用においてアメリカがなぜ日本よりも進んでいるのかというと、その部分を可視化させるメディアが出現しているからです。ハフィントンポストにせよ、ポリティコにせよ、プロパブリカにせよ。韓国のオーマイニュースやNEVERも含めていいのかもしれないですが、マスメディアとは違う世論がネットには存在していて、そうした世論がネットにどっぷり浸っていないおっちゃん、おばちゃん達にも認識されるようになってきているという事なんですね。これが次の段階です。日本はまだそこまで行っていません。韓国で転換点になったのは2001年の大統領選ですね。ノ・ムヒョン大統領の支持基盤はネット世代、386世代って言われていたんですが、彼らはオーマイニュースなどを舞台にネット世論を盛り上げて、結果ノ・ムヒョンは大統領になりました。イ・ミョンバクが出てきた時に30代の若い層がネット上で盛り上げて革新政権を誕生させてしまったと、保守側の年齢の高い層が危機感を持って、イ・ミョンバクを盛り上げるためにわざわざ保守層がネットにバーチャル後援会を作ったりしたという動きも起こったんですね。韓国ではネットを元々やっていない年寄り層にもネット世論の存在が認知されています。

—：ネットがインフラとしてすでに機能していたと。

S：もちろんそれはそれで色々と問題があって、韓国ではネット世論が暴走しすぎています。女優が自殺した原因がネットの書き込みだとされていたり、問題はあるんですが、少なくとも状況としては韓国が日本よりも先に進んでいるのは間違いないです。

パソコン通信ってな～に？

republic1963 (R) : まつなが様が最初にネットやられたのが1985年とのことですが、これはパソコン通信ですか？

まつながけいいち (ま) : オレが富士通に入社したのが1983年なんだけど、日本にはそのころまだパソコン通信は無かったんですね。インターネットはあったけど、商用利用が許されてなかったんで一般の人は誰も使えなかった。

R: 日本初のインターネットというとjunetですか。

ま: パソコン通信は普通に営利目的で企業が運営しているものですが、junetは学術目的のインターネットですね。普通の人にはアクセスできません。ただし、富士通だと研究所なんかはアクセスできたわけ。研究所のアカウントもらって、社内から当時のjunetにアクセスできた。まだブログもウェブもなく、ニュース中心ですね。ニュースといっても、掲示板みたいなもの。2ちゃんねるみたいという語弊があるけど、テーマ別にたくさん板？があって、その中で自由にトピックをたてられてた。それがNetNewsですね。例えば、fjはNetNewsの中の日本語で書いていい板 (From Japan)

R: パソコン通信とjunetはまったく別物で併存してた？

ま: 併存してましたけど、一般の人はパソコン通信以外の選択肢はなかったんです。パソコン通信は中央集権的なシステムなので、一社がコンピュータとディスクと回線を用意してみんながそこにアクセスするんですね。だから主催している会社ごとに使い勝手がまったく違うし、文化も違う。例えば、Niftyのメアドと、NECのビッググローブのメアドは相互運用できないんですね。完全に切り離されている。インターネットが使えないから、みんなそういうのを使ってました。

R: 私がビッググローブで、まつながさんがニフティだとしたら、両者はやり取りする事は全くないんですか？

ま: そうですね。オレ、BIGLOBEの人なんて当時ひとりも知らなかったよ。あと、パソコン通信には「個人のページ」という概念がない。掲示板しかない。

R: フォーラムですね。テーマごとに集まる掲示板。

ま: そうですね。シスオペという権限の強い人がいて、フォーラムの運営はその人に任されていた。FMシリーズのユーザのフォーラムなら、FMの話が多いし、テイストはフォーラムごとに違いますね。文科系のフォーラムもたくさんあったよ。冒険小説フォーラムとか。フォーラムは入

会するものなので、入会していないフォーラムは見もしない。

R: mixiのコミュみたいな感じなんですか

ま: 似てますね。でも、フォーラムの方が融通が利かなくて、シスオペでないとトピックが立てられないんです。

R: パソコン通信のスタートは85年ですか？

ま: アメリカではもう少し早くて76年。あと個人のパソコン通信ってのがあって、これは大手より早く広まりました。

R: 草の根BBSですね。

ま: そう。オレが会社にはいったあと、アメリカのパソコン通信にハマって、日本でもやろうよやろうよと騒いだ覚えがあります。「FMシリーズにもモデム内蔵しましょう！」とか。そのうち、なんか富士通もやる気をだして、Niftyとか作った。それが1986年ですね。

人はネット上だと急に言語センスがオヤジ化する

R: パソコン通信といえばニフティサーブってイメージがありますが、なぜニフティが盛んになったんでしょうか

ま: 当時の大手っていうとニフティかBIGLOBEかASCIINETか日経mixかな。ユーザーは日本中どこからでもアクセスしたいわけです。会員は日本中にいるから。ところが当時は電話でアクセスするから、アクセスポイントが市内にないと大変なことになります。そういった大規模なアクセスポイントをもっていたのは、ニフティとBIGLOBEでした。

R: ニフティにはアクセスできた人数がそもそも多かった。

ま: うん。そう思う。ニフティはアメリカのCompuServeと提携していたし。当時は電話だから、国際電話かけるとか、海外のアクセスポイントにかけるためのサービスに契約するとかしないと海外からはアクセスできませんでした。

R: そうこうしているうちにお仕事としてもインターネットに関連した業務をされるようになった。

ま: まずパソコン通信のソフトを開発した。PCの開発部隊にいたころ。それが1990年ぐらい。で、パソコン通信ソフトを作ると、当然一日中パソコン通信していて「なんて面白いんだ！」と。おかげさまで奥さんも見つけました(笑)。

R: 詳しく教えてください！

ま: 当時のフォーラムには「いまログインしてフォーラムを読んでいる人のIDを表示する」って機能があって、でも違うフォーラムにいる人は分からない。でもIDが見つかれば、今度はそのIDの人に直接メッセージを送る機能があった。なので特定の人を見つけるには、とにかくその人がいそうなフォーラムにいて、ID一覧をとるのを繰り返すしかないんですね。で、私は結婚前の奥さんをつかまえたくて、一定の周期で特定のフォーラムを巡回して、奥さんのIDを見つけたら「こんばんわ」とかメッセージを送るプログラムを書いて、走らせていた。という話を飲み屋ですると、大抵「ストーカーだ！」と言われます(笑)。

R: すごい！それってネゲットってことですよね？

ま: それもダサい言葉だけど、当時は「パソ婚」っていう、まけずおとらずダサい言葉があった。なんで人はネット上だと急に言語センスがオヤジ化するんだろうね。

R: パソ婚！ヤバい。ネゲットが急に恥ずかしくなりました。

ま: いや、それは前から恥ずかしいよ。

R: 当時のパソコン通信も大概恥ずかしかったと。

ま: パソコン通信の頃はまだ若くて人間も出来てないから、会社のIDで、言ってはならないことを言って、大問題になったりしました。あの日はすごかったなあ。入社したらフロア全体が騒然としてた。まさかオレの発言が原因だったとは。わざわざオレの発言を会社の偉い人に送った方がいらして。

R: それはまずい。

ま: いま思うと上司がかばってくれました。オレ、上司に事情をきかれて、やったことを全部言って、「でも謝る気はありません」とか言っちゃったもの。そしたら上司は「そうか」で終わった。上司は凄く大変だったと思いますよ。

インターネットにおける時代の普遍性とは

ま: で、パソコン通信のことばかりやってたら、通信の部署に呼ばれて。通信といっても、MagicCapという次世代（と、そのときは思った）のデバイスです。開発はGeneral Magicってアメリカの会社で、デバイスをライセンスしていた。日本の企業は何社もそれにのって富士通がその一社だったんですね。ところが、開発中に急速にインターネットがたちあがって MagicCapは離陸できなかつた。それが1992年ぐらいです。で、その部署はそのままインターネットで何かやる部署になり、そのまま富士通からスピアウトして、別会社になって、オレもついて行って、今に至るという。

R: インターネットとともに歩んだような職歴ですね！

ま: でも最初はHTMLって何？の世界で大変でした。後にホームページ→ブログってブームが来たけどもう大人だったので大人しくしていました。たまに絡まれても穏便に(笑)。

R: はてななんかでは今でも「男女の友情は成立するか」みたいな、非常にくだらないテーマで白熱した議論していたりするのを見られてどう思われますか？

ま: ああいうのってパソコン通信の頃と変わらないんだよね(笑)ゲハ戦争とか当時のPC機種間のいがみあい似てる。変な造語で相手の機種をけなしたり。当時はアンチNEC派は、PC-9801（通称98）のことを「窮八」って書いたりしてた。

R: (笑)でも、ネットユーザーというのも人口がかなり増えてしまっている印象はあります。でもやってる事は同じ。

ま: 同じじゃない部分もたくさんあると思いますよ。ユーザのセンスが発揮しやすくなっているから、サイトのデザインとか、動画をアップロードしたりとか、そういうのが桁違いによくなってますよね。帯域が広がった分、ちゃんと使ってるところは使っているなあと。

R: 逆に変わってないところはオヤジ化するところですか。

ま: ははは。そう。ああいうのはインターネットの時代になって視野が広がればなくなるかと思ってたのに。けっこう視野が広がっても思考は狭くなったりするのね。

ま: 「パソ婚」と「窮八」には時代の普遍性を感じるでしょ。

R: 間違いなく10年後も同じようなこと言ってるんでしょうね。twitter婚とか、言い換えて。あまりそういうのをバカにしないようにしたいと思います。

ま: そうそう。あんまり言っているといつか自分に跳ね返ってきますよ。

「野球をやるのは誰のため？」

中日ドラゴンズの落合博満監督は、千葉ロッテマリーンズとの2010年日本シリーズ第四戦、延長11回までもつれこみ、試合終了は23時近くになったその大熱戦の勝利監督インタビューで、一言もファンへのことばを発しませんでした。11月の23時ともなればかなり寒く、しかも風があることで有名な千葉マリンスタジアム。もちろん、帽子を取って挨拶はしたのですが、観客への配慮の言葉すらないそのインタビューを、ぼくは「われわれはファンのためにのみ野球をやっているわけではない」というメッセージとして受け取りました。

落合監督は、自分に与えられた役割が何であるかをきちんと把握し、その遂行のために動いているように見えます。監督に与えられた役割とは、与えられた戦力で勝ちきること。野球、あるいは対戦相手が存在する全てのスポーツの目的とは、相手に勝つことです。それ以外のことは、そのスポーツの本質ではありません。プロ野球が興行である以上、観客を楽しませ、それによって収益を上げなければならないのですが、基本的にそれは「観客のために」という目的によって行われるのでなく、選手やチームが「自らのために」見せる素晴らしいプレイによって行われるべきなのです。

ところで、野球というのは非常に難解なスポーツで、他のスポーツに比べ動きが非常に少ないように思います。バッターがボールを打ったときにしか、野手が動くことはあまりありません。フィールド全体が動きを見せるのがほんのひと時しかないこのスポーツは、活劇というよりもむしろ心理劇的な側面を強く持っています。打者なら投手が次に何を投げてくるか、投手と捕手は次に打者は何を狙ってくるのか、一球ごとに変わってくる状況においてそのようなことをいちいち予測しながら、選手達は次の瞬間を待ち続けているのです。そしてこのことは、野球をよく知らない観客にとって、野球とはなんと退屈なスポーツだろう、という印象を与えることでしょう。これは、野球を知らない人と一緒に野球を観たことがあるすべての野球好きに、身に覚えがあることかと思えます。活劇なら、選手達の動きを見ていればなんとなく雰囲気がかめてきます。しかし心理劇ともなると、今がどういう状況なのか、きちんと把握できていなければ、何が起ころうとしているのか、その期待に胸を膨らますことが出来ないのです。

かつてそのような人たちを野球にひきつけるために、あるいは結果としてひきつけたものとして、様々な「物語」がありました。王と長嶋を中心とした巨人のV9時代、85年にバースらを擁した阪神タイガースの優勝、88年の近鉄バファローズの10.19、94年の中日巨人の10.8決戦などなど。もちろん今でもそれはあります。例えば高校野球。毎年夏に、球児たちは自らの三年間あるいは試合に出ることが叶わない先輩たちの思いを背負って、負けることが許されないトーナメントの大会を戦います。それらの物語はとても美しく見え、観客を感動させ、野球への入口となってくれます。そのような物語に魅せられ、野球を観始めたり、あるいはプレイする人も多かったです。そしてそれが次の世代にも受け継がれていったのが、90年代前半までの日本の野球

をとりまく状況でした。

現在、サッカーなどさまざまなスポーツが日本においても現れてきて、野球人口も減ってきたことは確実でしょう。今回、このエッセイを書こうと思った動機は、11月1日に「Number Web」に掲載された中村計氏の「「野球は素晴らしい」と語る落合監督。その“夢”はファンに届いているか？」と題されたコラムを読んだことでした。この記事を要約してみましょう。

——2010年度の日本シリーズではテレビの地上波で中継されていない試合がある。このことはプロ野球は砂漠化していることを示している。その原因の一つに、プロ野球は夢を与えられなくなったということがあるだろう。2007年の日本シリーズで八回までパーフェクトピッチングを見せていた山井を、九回のマウンドに上げず、勝利を確実にするために岩瀬を上げたことなどは、その顕著な例だ。「勝つ」という点において、落合は「中日ファン」を非常に大事にしている。しかし彼は、プロ野球全体のファンを大事にしているわけではない。「中日」ファンのような、ある種コアなファンしか取り込めないようでは、今後も日本シリーズが地上波中継されないこともありうるだろう。そうならないためにも、「夢」のある野球をやってほしいと願う——

中村氏は、おそらく先に書いたような「物語」をプロ野球は取戻すべきだ、と考えているのだと思います。野球というスポーツの玄関の間口は、これから野球を知る人のために、もちろん広く取るべきですが、その家の中は一体どうなっているのでしょうか。落合博満の言う「野球の素晴らしさ」とは、家の中のことなのです。なぜ日本で野球へ関心が向けられなくなったかの一因には、観客が間口を広く取られた玄関にとどまっているばかりで、家の中を見ようとしなかったことがあるのではないのでしょうか。玄関の間口を広く取るだけなら他の家でも出来ますし、あるいは新しい家には「新しい」というだけで行ってみたくなるものです。野球が観客を家の中まで招待し、その魅力を余すところなく見せていたのであれば、また違っていたのかもしれませんが。野球が「実力のパ、人気のセ」と言われていた時代、なぜ「実力のパ」に観客が集まらなかったのかといえば、強力な物語を用意できず、マスコミを引き込むことも出来なかった、つまりセに較べて玄関の間口を広く取ることが出来なかった、というだけなのでしょう。

強いということは、それだけ魅力的な野球をやっているはずなのです。熟達した観客達は、監督や選手がなぜこのような行動を取り、それがなぜ勝利へ結びつくのかを考え、次の試合を見るときに、チームの意図を考えながら試合を見るのを楽しむことが出来るのです。ならばプロ野球は何をすべきなのか。玄関の間口を広くとって観客が入らないのであれば、まず今いる観客に家の中の面白さ、つまり「野球の素晴らしさ」を届けることが大事なのではないのでしょうか。そしてそれは、選手にまつわるエピソードや彼らの偉大な記録などの「観客」に向けられた物語などではなく、「自ら」の勝利のために生み出された、素晴らしいプレイの積み重ねによる勝利、そしてなによりその素晴らしいプレイが起きる「瞬間」なのです。落合博満は、それを見せてく

れるのです。

なぜそれが落合博満に可能なのかというと、荒木・井端というおそらく日本野球史上に残る二遊間コンビを自ら振ったバットで育て上げ、自身の信じる野球のやり方を厳密に守り、「瞬間」をいかに生み出し、いかに積み上げるかを知っているからなのです。それを全くぶれることなく、淡々と遂行できる落合監督は、間違いなく偉大な監督なのです。この選手・監督「自身」のために生み出された瞬間を「観客」へ見せることこそ、熟達した観客達を生み出す最良の手段であり、落合博満が日本の野球のために行っている、最も素晴らしいことなのです。